

それに対する解説 (vutti) 、そして具体的な用例 (payoga) の三部分を一纏めとして解説されてゆく。スートラ数は、現在流通している多くの版本に相違が見られ一定した数え方は確立していない。そのような混乱の主な原因は、Kaccyāna 系の各文法書に共通しているスートラを用いる際、それらが Balaṃ でもスートラとして挙げられているものなのか、或いは、vutti で解説を明確にするために典拠として引かれているものなのかを明らかに区分できない場合がしばしば見られるからである。そして、私見による限りは、スリランカの諸版本は殆んどの場合、これらをスートラとして数えるのに対して、インド版等では別のものと見て Balaṃ のスートラとは扱っていない方が多い。数が定まっていないのは我々にとっては不便ではあっても、実際の学習者はスートラを総て暗記していた訳であるから、そのスートラが何章の何番目に当たるか等という面はあまり頓着する必要がなかったのかも知れない。従って、確定的なスートラ数は現在準備中の校訂版発表の後に明らかにしたい。

さて、ここで種々の細かな問題点や特色を論じている余裕はないが、全体を通してパーリ文法学の一般的な傾向に倣い Balaṃ でも、Taddhita が重視され詳細な解説が加えられるのに対して、Samāsa についてはサンスクリットの場合とは異なり簡略な記述しか見られない点がまず目につく。また、語形論の上で比較言語学の立場からは異論があっても、実際の曲用の面からはむしろ合理的とも言える、Dham の語幹の母音表記とそれに基づく分類は西欧の文法書に親しんだ我々には最初とまどいを感じる。また、当然のことながら、中期インド語の一方言形としてパーリ語を捉えずに、そのみが他の言語と関連性を持たず独立して存在しているような立場で語形変化や語源を求めるために、或る場合には奇異な解釈が目立つものも存在する。それらの各事例については別に詳論することにして、最後に vutti で解説の方法に関する全体的な特徴を示しておく。

各スートラに対する解説 vutti は、六種の古典的な方法によって記述される。それらの方法の名称は以下の通りである。

- 一、Satāṇa 表示。表わされているものの直接的な説明。
- 二、Paribhāsa 規定内容。
- 三、Vidhi 音韻変化等の規則。(例えば、音の代置 adesa、新しい音の捜入 āgama、音の欠落 lopa 等)
- 四、Niyama 一般的に示されているものの強調。
- 五、Andesa 既述のもの繰返し。
- 六、Adhikāra 前後のスートラの関連性。

勿論 vutti の中には、これらの要素が総て充足されていないものも多い。しかし、

Balaṃ に関する最も定評ある解説書 Paṭṭhānanda 版 (Colombo, 1934) の註釈 (シンハラ語) には、上記の六種に基づいた極めて明快な説明が施されている。その意味では、我々にとってはいささか煩瑣なこのような区分も、彼らの思考方法から導き出された合理的な分類と考えなければならぬ。

以上、紙数の都合で細部の内容分析や検討を省略したが、前述の如くいずれ批判的な校訂版確立の後に詳細な考察を試みたい。

(註記省略)

『釈浄土群疑論』における不可解なる文章の解明

村上真瑞

『釈浄土群疑論』における浄土の三界摂、不摂に関する問題について、日本において古くは、道忠の『釈浄土群疑論探要記』、宣明の『釈浄土群疑論口義』等の末書類に引用されている。近年における研究では、望月信亨博士が『中国浄土教理史』の中において、

「之を要するに西方浄土は、仏の所変についていへば無漏他受用の浄土であり、凡夫自心の所変についていへば有漏の土で、即ち欲色二界の摂とせなければならぬ」として、凡夫所変の浄土は三界の摂であるという説をとられている。また神子上惠龍博士は、『弥陀身土思想の展開』の中で『釈浄土群疑論』の大意を和訳しながら、最終的に、

「第一釈は有漏の浄土はこれ欲色二界の摂とする。即ち有漏心は三界を離れぬものなれば三界の摂といふべきである。三界の中、彼の浄土は欲色二界の摂である。(中略) 第二釈は、有漏所変の浄土なりとは云へ、三界の摂と為すことは出来ないとする。何者、有漏の名は寛く、三界の名は狭い、經に浄土に生ずれば五趣無しと云つてゐる。故に有漏とは名くべきも、三界の摂と云ふことは出来ないといふのである。此の如く二釈ある中、初釈を以て正としてゐる」

として、凡夫所変の浄土は三界摂の説を正しいとされている。これら三界摂の説の論拠は次の問答の中に表れている。すなわち『釈浄土群疑論』巻第一によると、

「問。若不_レ許_二是欲色界攝_一者何因_二无量寿經言_三乃至淨居天等_一答。此是施設_レ為_レ天不_レ可_レ即_レ為_二実天_一二分_二欲色界上_一也。若実天_一者如来淨心所變_レ豈_レ是欲色界攝_一又言若

是色界、者已下欲天為勝、為劣。若劣、者如何色界反劣、欲界、若勝、者如何此娑婆世界。欲色兩界勝劣不同、欲色有情優劣差別、彼土亦爾、生三色界、者勝、生三欲界。何因、四十八弘誓願、說國中、人天形色不同、有好醜、者不取正見。彼色界形勝、三欲界形、如何說同。故知、仮安立說、為淨居天等、非、實、即是欲色界、也。於三前、二解、初、積、為、正、異、熟、識、體、是、實、有、情、生、彼、衆、生、諸、菩薩、等、未、滅、三、異、熟、何、得、說、彼、非、實、天、人、二、

と説かれる。すなわち、もし欲色界の撰ではない、というのであれば、なぜ『無量壽經』に淨居天の名が出ているのか。という問いに対して、次のように答える。この天は、仮に施設、安立したもので、実際に天ではない。先ず、もし実の天ならば如来の所変が欲色界の撰であることになるが、如来の所変は欲色界の撰であるはずはない。また、もし色界の天であるなら、欲天との勝劣があるはずである。もし淨土にある天に優劣差別があるなら何故に阿弥陀如来は四十八願の中に、極樂淨土の人天の形色が同じでなく好しいもの醜いものがあつたら成仏しない、という願をたてているのか、まさにその願に反している。だから、この『無量壽經』に説く淨居天は仮に施設、安立されたもので実際にあるのではない。よって淨土は欲色界の撰ではない。と答えている。さて、ここにおいては、淨土の三界不撰を説いているが、このあとに、不可解な文章がつけ加えられている。すなわち、前の二つの解釈において初めの積を正しいとする。なぜなら、異熟識の体は実の有情のものだから、淨土に往生した者に異熟識が残っているならば、どうして実の天人でないといえようか、いや実の天人である。と示し、この一文によって以前何度も、天人は仮設のものであり、淨土は三界不撰のものであると述べてきた説を翻している。ここでいう二積の中初めの積とは『釈淨土群疑論』巻第一において

「積曰。此有三積。一、有漏淨土是欲界撰。以有漏心不離三界。故三界即有漏。有漏即三界。既言有漏、即三界撰。」
と説かれる初めの積である。すなわち、有漏なる心を変現した淨土は三界の撰である、という説である。これに対して、後の積とは、『釈淨土群疑論』巻第一において、
「二積、雖是有漏所變淨土、不得名為三界撰。」
と説かれる二番目の積である。すなわち、たとえ有漏なる心を変現した淨土であっても三界の撰とはいえない、とする三界不撰の説である。したがって前の不可解な文章の含まれる問答においては、不可解な文章の前までは、様々な經証を引いて三界不撰の証明をしておきながら、不可解な文章によって、三界撰の説を肯定しているのである。これはどう考えても前の文章とのつながりの上で不可解と言わざるを得ない。そしてこの不可解な文章は道忠によって、凡夫所變の淨土は三界撰であるとする説の根

拠として解釈されている。すなわち『釈淨土群疑論探要記』巻第三によると、
「初解、為正者於三界撰不撰義中、初撰為正、所以者何。異熟識是界趣生、生、彼衆生及諸菩薩、未滅異熟。何得說為非、實、人天。是約、能居、以顯三所居、正、若、實、人天趣、依、必、可、三、界、故。」
と説かれるように、初解を正とするということは、三界撰不撰の問題の中、三界撰を正とするということである。なぜなら、異熟識は三界、趣生の体であるから、淨土に生ずる衆生や菩薩であっても異熟識を未だに滅していない。異熟識の存在する人、天が居る淨土は三界撰である。として淨土は三界撰であるのが正しい、とする証明をしている。したがって、この道忠の理解が、近年の研究にまで影響をあたえ、懷惑の立場は、三界撰であると考えられてきた。たとえば、前に紹介した望月信亨博士、神子上恵龍博士などの説がそうである。

では懷惑の立場は、三界撰であるとする以外の説には、どのようなものがあるのだろうか。岸寛勇氏は、『統善導教學の研究』において、
「懷惑には三界撰と不撰の二義あり」
とだけ述べられ、金子寛哉先生は、服部英淳博士が、
「懷惑が群疑論を作つて唯識法相によつて淨土を説明したのは、極樂淨土の唯報非化を強調した師説に背くものではなく、これによつて指方立相の報土に対する疑問や誤解を懇切に氷解したのである」
と述べられているのを受け、従来の説は、
「懷惑が唯識の立場で淨土を説かれたものとする先入觀念を持つて群疑論が読まれる為、不撰の義に淨土門の道理のある事を認め乍らも、懷惑の真意が不撰の義にあるとする事が出来なかつたようである。」
と述べられ、江戸時代の真宗大谷派の講師、宣明の『釈淨土群疑論口義』を引用する

ことによつて、『釈淨土群疑論探要記』において解釈されるような界撰の義は、慈恩の『大乘法苑義林章』仏土章に準じたものであつて、「但だ彼の相宗を学ぶ人を引き、往生淨土門の内に入らしめん為に」説かれた隨他意の説であつて、懷惑の真意ではなく、懷惑自らの隨自意の説としては、阿弥陀仏の本願不思議の力に準ずるのであるから、凡夫の往生する淨土もまた、三界不撰でなくてはならない。として、金子寛哉先生は、前の不可解な文章を宣明の『釈淨土群疑論口義』巻第二の解釈を引用することによつて説明されている、すなわち、
「諸經論中專勸願生、是則往生淨土門、教不共說。如明三教、其二中、說、然、今評三取、前義、即、經、古、說、論、主、將、斷、三、取、後、義、故、仮、設、問、答、所、以、得、知、如、上、有、問、答、言、自、下、安、問、積、字、此、即、示、自、解、歟、如、是、分、別、約、三、世、俗、諦、若、非、安、立

諦則不可思議、結勸是也。」

と説かれるように、前の不可解な文章において、懷感が前の解を正しい、としたのは、古説を紹介しただけであって、本来は後の解を正しいとしているのである。そのようなわけで、仮に問答を設けたのである。だから問答のあと、もう一度問、釈の文が置かれている。この問、釈こそが懷感の説である。として、最終的には、三界摂、不摂などの分別は世俗諦のものであり、非安立なる真諦は思議すべからざる信心の結勸である、と述べて信心こそが真諦であると宣明は示している。さて、この『釈浄土群疑論口義』巻第二では、不可解なる文章が含まれている問答を、古説であり、仮に設けられたものとして、懷感の本意ではない、と述べられているが、しかし私は、この問答を読んだところ、不可解な文章が付される前までの問答は、決して古説、仮設のものとは思われず、懷感の本意として認めてもよいと考える。なぜなら、後に詳説するがこの問答以前にも、何度となく、浄土に人、天がいるという説は、余方に因順するが故に、仮設されたものであつて、実の人天が浄土にいるのではないと述べているからである。このようなわけで、私は宣明の『釈浄土群疑論口義』巻第二における解釈には同意することができない。それでは、私自身としては、いかに解明すべきであろうか、以下考察してみたい。

この解釈は私の試論であるが次のように理解してはどうであらうか。すなわち、先に述べた不可解な文章は、前文の答の内容ではなく、後にすぐ出る問の文章に接続されるべきものと考えるのである。すなわち

「於前二解初、釈為正。異熟識、體是實、有情。生彼衆生諸菩薩等、未減異熟。何得説彼非實、天人。問曰。若凡夫所變淨土是有漏、非三界所感之生、彼者不同、余入天造惡受苦果説。非三人天。如勝鬘經説、變易生死非三界攝。非彼生死果報。是化生。非三人天趣。者未知淨土化生凡夫非三界。要略經説、三界之外有衆生、者是汧沙王國安多偏師義。非三仙説。故是三界身。豈非三界身耶。依此後、解復為斯問。」

というように文章を接続させて、次のように解釈してみたい。つまり、問を出す前に、問う側の意見を述べ、そのあと問を出したと考えるのである。そこで、私が読解したように訳してみよう。「前の二つの解釈において初めの釈の方が正しいと思う。なぜなら異熟識の体は実の有情のものだから、浄土に往生した者に異熟識が残っているならば、どうしてその者が実の天人でないといえようか、いや浄土に往生した者は、実の天人である。(このような訳で浄土は三界摂であると考える。)そこで次の質問をしよう。凡夫所變の浄土は有漏であつても三界不摂であり、浄土に往生した者は、他の惡を造り苦を受けている人、天とは違い、人や天ではないというが、『勝鬘

經』に變易生死は三界不摂であると説かれているから、浄土に往生した凡夫の生死も実の報によるものではなく變易生死であるのか、また、浄土に往生した者は化生であるから人、天趣ではないというが、どうして浄土に化生した凡夫が三界不摂なのか解らない。『要略經』には三界の外に衆生があるとするのは、汧沙王國の安多偏師の説であつて、仏説ではないとされている。したがつて浄土に往生した凡夫であつても三界摂であつて、三界不摂とは決して言えない、このようなわけで、私は、初と後との二つの解釈のうち、後の解釈に疑問があるので、重ねてこの質問をするものである。」と訳される。ここで注目しなければならないのは、この文の最後に出る「後解」という語である。この「後解」は、先にあげた不可解な文章において「初解」という語が見出されるが、この「初解」すなわち三界摂説と「後解」すなわち三界不摂説とは一対をなすものであり、さらに、先の不可解な文章において「前二解」という語が見出されるが、この「二解」とは、まさに「初解」と「後解」との二解であるから、先の不可解な文章は、今、私が試みたように、後の問と接続して読むならば、まったく不可解ではなく、首尾一貫した意味の通る文章として理解することができ。そしてもう一箇所注目したいのは、やはりこの文の最後に出る「復為斯問。」という文の「復」の語である。この「復」は重ねて質問することを意味しているが、なぜ重ねて質問すると言ったのであろうか。これについて、私は次のように解釈してみたい。すでに、この問答と同じ趣旨の問答が『釈浄土群疑論』巻第一のはじめの部分において次のようになされている。すなわち、

「問。既是有漏識心所變、有漏之心即三界攝。無有有漏心而出三界攝。心既三界攝、所現淨土寧非三界耶。答。雖知有漏體性不出三界、然以別義、但得名有漏、不得名三界。故三界名局有漏名寬。亦如凡夫得生西方、非五趣攝。故無量壽經言、橫截五惡趣、惡趣自然閉。又阿彌陀經言、彼仏國土、無三惡趣等。又無量壽經言、彼國衆生非天非人因三順、余方故有人天之号。故知彼土無五趣。既許三生、是凡夫、而非五趣所攝。何妨土名有漏、而非三界所收。」

と説かれるように、もし有漏心の所變の浄土であるならば、三界を出過できるはずはないのであるのに、どうして三界不摂であると証明できるのか、という問いに対して、『無量壽經』の「横截五惡趣」「因順余方」「阿彌陀經」の「仏國土無三惡趣」等の偈を引いて、人、天があるとするのは衆生に対してわかりやすく示すために仮にその名を出しただけであるとして、たとい有漏であつても三界を出過し得るといふ見解を示している。この例以外にも同じ趣旨の問答が何度か出ていることから、懷感の相手としている者は、何度となく懷感と論争し、常に平行線をたどっていたと考えられる。そして、その懷感と相容れない意見とは、前の不可解な文章の中に表れる主張

であるとすれば、この「復」の文字も、この文の中で意味をもったものとして生きてくる。したがって、このような理由からも、先の不可解な文章は、後の問と接続して読むべきである。

さて、以上のように、先の不可解な文章と後の問とを接続して読むならば、前にあげた道忠の『釈浄土群疑論探要記』の解釈も、望月信亨博士の説も神子上恵龍博士の説も、その論拠を失うこととなる。つまり、凡夫所変の浄土は三界摂であるとするのが正しいという説は、懷感の説ではなく、懷感に対して問を起した者の説であるということになる。これは、この問に対する懷感の釈を読むことによって理解される。すなわち『釈浄土群疑論』巻第一によると、

「釈曰。此何所。惑更。為三問。淨土器世間。雖有漏。識心所變。而不得名。三界。即有漏義。寬三界義局。淨土凡夫。但名。化生有情。不得言。人天二趣。此即四生義。寬五趣義局。今此亦爾。雖是凡夫有漏之身。不得名。為三界身也。」

と説かれる。すなわち、何の惑があつてか、何度もこんな問をするのか、凡夫が往生すべき器世間としての浄土は、たとい有漏の識心の所変であるとしても三界ということとはできない、なぜなら有漏の意味は寛く三界の意味は狭い。また浄土へ往生した凡夫はただ化生の有情であるから人、天二趣ということとはできない。これは四生の意味は寛く五趣の意味は狭いからである。今の問もまたこの理論により明白である。したがって、たとい凡夫の有漏の身であるといつても三界の身であるということとはできない。と懷感は釈しているのである。もし懷感が本当に三界摂の説を正しいといっているのであれば、この釈を試みた理由、意義はあり得ない。また、この文の中に出る「浄土凡夫、但名化生有情、不得言人天二趣」という一句は、先にあげた不可解な文章に対する釈として充分に説得力を持つものである。よって、この釈からも、前の不可解な文章を後の問の文章に接続して読むことが、この文を読解するのに不可欠なこととすることができよう。

以上のような理由によつて、従来の『釈浄土群疑論』理解の中で、「懷感は凡夫所變の土を三界摂とするのを正しいとしていた」とする、道忠、望月信亨博士、神子上恵龍博士等の説について疑問をいだかざるを得ない。これについてはすでに金子寛哉先生も述べておられるが、今回私は、従来と異なる文章解釈によつて明白な論拠をあげ、その証明をなしたものである。私の試論であるゆえに、諸先生からの御指導を乞うものである。

註① 望月信亨著『中国浄土教理史』二三三頁。

② 神子上恵龍著『弥陀身土思想の展開』三四九頁。

③ 『浄土宗全書』六卷一〇頁b―一一頁a。

- ④ 同右、六卷八頁b。
- ⑤ 同右、六卷九頁a。
- ⑥ 同右、六卷一七九頁b―一八〇頁a。
- ⑦ 岸寛勇著『統善導教學の研究』一八八頁。
- ⑧ 服部英淳稿「禪淨融合思想に於ける浄土の解明」(『仏教大学研究紀要』五〇号八七頁)。
- ⑨ 金子寛哉稿「懷感禪師に於ける浄土の三界摂不摂論」(『仏教論叢』一三三号六四頁)。
- ⑩ 『釈浄土群疑論口義』三十七丁左。
- ⑪ 「斯亦乘阿弥陀仏不可思議弘誓願力、令其業力感報極長、非是凡夫所測度。經文顯然。不可不信。大乘道理意趣難知。諸仏境界非凡所測。但知仰信專誠修學。不可不一依諸法相楷定是非。論是三界非三界也。」『浄土宗全書』六卷一一頁b―一二頁aの文を指す。
- ⑫ 同右、六卷一一頁a。
- ⑬ 『大正藏經』一二卷二一九頁c―二二〇頁a類似的文章あり。
- ⑭ 同右、二四卷一〇一八頁a、一〇一九頁a類似的文章あり。
- ⑮ ここで懷感が相手としている「問」の意見をもつ者は、慈恩と考えられ、その主張は、『大乘法苑義林章』巻第七仏土章の中にあらわれている。『浄土宗全書』六卷九頁a―b。
- ⑯ 『浄土宗全書』六卷一一頁a。

廬山の慧遠と東林寺

稲岡 誓純

一、

中国仏教史上、廬山の慧遠の業績は、大別すると二点に別けることができる。まず第一点は、社会的には中国固有の礼と仏教との対立の問題、思想的には格義仏教からの離脱の問題、教理的には神滅・不滅と般若・空との止揚の問題義について、中国仏教史上初期の時代にありながら、彼ながらに解決したことである。これらは、中国人による中国人の仏教を作り上げる上で、最も重要な淵源となったことであり、それは